

# 廣福寺だより

2021年1月



本堂中央欄間 浄土に咲く蓮の図

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

昨年から、会いたい人に会えないことが続きます。住職も残念ながら、昨年六月に生まれたふたり目の外孫に会えないままです。スマホで送ってもらった写真を見ることで、成長するすがたを追っています。

最近、童謡詩人の金子みすゞさんの詩の一節を思い出しています。

青いお空のそこふかく、  
海の小石のそのように、

夜がくるまでしずんでる、

昼のお星はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、  
見えぬものでもあるんだよ。

(『星とたんぽぽ』)

わたしたちが見る青空のかなたには、本当はたくさん星があつて、宇宙で輝いています。「見えぬけれどもある」のです。

『正信偈』の「たとえば日光が雲や霧におおわれても、雲や霧の下は明るくて闇がない」ということを思い出します。見えないけれど太陽のはたらきは、まちがいなくここに届いているのです。

いま、会えないけれども大切な人がいること。そしてあたりまえになって、見えていなかった日常のかけがえのなさに気づいてくれよと、お念仏のよび声が響きます。

報恩講

十一月七日(土)に、報恩講法要がとまりました。住職登壇での行譜正信偈六首引のお勤めを行い、報恩講の御勸章を拝読しました。

お勤めの後、出雲崎・萬因寺ご住職の高橋速円師に法話を頂戴しました。

生死の苦海ほとりなし  
ひさしくしづめるわれらをば  
弥陀弘誓のふねのみぞ  
のせてかならずわたしける

『高僧和讃』

昨年の報恩講ではお経の「経」の字の説明をさせていただきました。経とは縦糸、人生を貫く道するべという意味があります。もう一つ、お経は「鏡」であるということです。

善導大師は「経教はこれをたとうるに鏡のごとし」と申されました。昔の鏡は青銅や白銅でできており、今みたいにピカピカしていないし、よく映りません。それは磨かれていないからです。お経は鏡ですから、ただ読んでいるだけではダメなのです。磨くということはお経の中身をこの身に領ける事実として受け止めていくことです。上手に読もうとすることに捉われて、肝心の

中身を受け取っていかないと、意味がなくなってしまう。

そうして磨かれた鏡で見えてくるのは私たちの生きざまです。煩惱に覆い隠され、世間の目ばかりを気にして生きています。私たちの姿です。お経が「鏡」と言われれば今度はその「映り」ばかりが気になるのが私たちなのです。こうした生き方を地獄とも申すのでしょうか。お経を読んでもその意味を頂いていかないと地獄の話も他人事、ああそうですかとなってしまふ。

私たちは自分の思いだけで生きています。そうやって生きているから、生死の苦海の中であえていっているとされるのです。あえていえることは教えるに出遇わないとわからない。教えるに初めて映し出される私の姿。それに気づけば毎日のお経に向かう姿勢も変わってくるのでしよう。

こうした私たちが阿弥陀様の力で往生していくのです。それはたつきをこの身に頂いて生きていけるのか。十分前の私は存在しないし十分後の私もどうなっているかわかりません。「今」この瞬間に教えるに領けられているのが大事なのです。

(法話より一部抜粋)



報恩講「御仏供米」御礼

報恩講に際しまして御仏供米をいただきました。心より御礼申し上げます。

- |         |         |         |         |         |        |         |         |        |        |             |           |
|---------|---------|---------|---------|---------|--------|---------|---------|--------|--------|-------------|-----------|
| 麓       | 麓       | 麓       | 麓       | 麓       | 麓      | 麓       | 麓       | 麓      |        |             |           |
| 木村郷左工門様 | 山岸 与一郎様 | 近山五左工門様 | 小林治右工門様 | 石井政右工門様 | 松井 長七様 | 松井辰左工門様 | 八子喜左衛門様 | 武石 元助様 | 吉田 信一様 | 勘助郷屋 松宮 信一様 | 幕島・京ヶ入の皆様 |



## 女性講

十一月二十四日(火)に、女性講がつとまりました。月潟・梵行寺ご住職の木村俊尚師にお越しいただき、法話を頂戴しました。

十方恒沙の諸仏は  
極難信ののりをとき  
五濁悪世のためにとて  
証誠護念せしめたり

『浄土和讃』

諸仏と申すのは、私に「気づき」をもたらしてくれる存在のこと。たとえばこのうちであっても、親に願われ誕生し、そして誰かの唯一の存在にすでになっている事実<sup>じじつ</sup>に領けたとき、このいのちを育んでくれた多くの存在を諸仏として拜んでいけるようになります。いろいろな人に支えられながら生きていくという当たり前のことに、気づいているようではなかなか気づいていないのが私たち。そうさせているのが五濁という「濁り」です。「濁り」とは言い換えれば「捉われ」です。自分の思い、考えに捉われ滞っていること。

私の祖母が昭和六十三年に脳溢血で倒れて八年近く寝たきりでした。戦前・戦中・戦後を生き抜いてきた祖母でしたから、苦勞の連続の人生でした。寝たきり生活の前

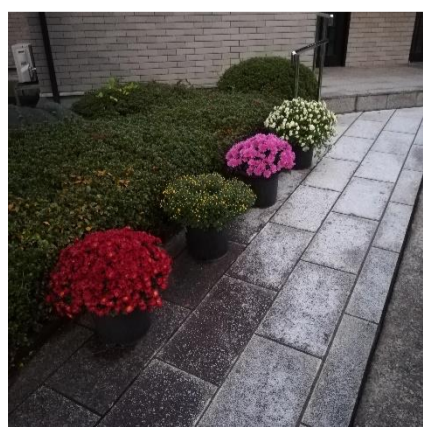
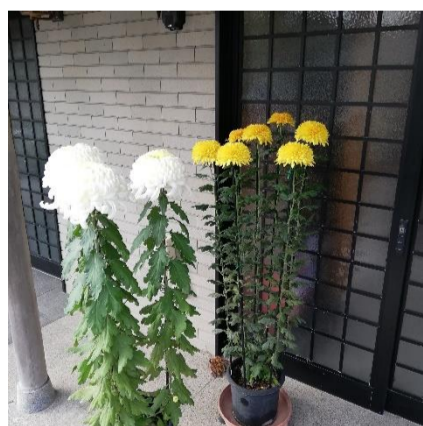
半は「なんでこんな苦勞ばかりの人生なんだ」と愚痴ばかりでしたが、後半は「世話になってありがとうね」と感謝のことばを口にするようになりました。人の厄介になる、世話になって生きるということは相当な覚悟がいることだと思います。そうはなりたくない、人の厄介にならないし誰の手も借りずに生きていきたいと思うのが私たち。そう願っても人の厄介にならずには生きられない、人に迷惑を掛けながらも生きていくのが私たちであり、そういう人生をみんなが歩んでいるのです。その事実がわからないでいるから、濁っていると言われるのです。こうした気づきをもたらしてくれるのが念仏の教えなのです。

あるご門徒さんで、十三回忌になってようやく兄の法事をしたとお寺に来られた方がいました。生前はその兄に迷惑を掛けられっぱなしだったそうですが、ようやくその兄の人生を仏として拜むことができたのだなと感じました。繋がっていくものを自分の中に感じないとそういう思いになってこない。苦悩の多い人生の中で、私に關わってくる人々を諸仏として拜んでいくのか、それとも厄介ごととして受け取って生きていくのかで人生が大きく違ってきます。こうした生き方を次の世代へと相続していく大切な役割を私たちは担っているのだなと感じさせていただきました。

木村俊尚師



今年も麓・廣澤弘(新八)様より菊の鉢植えを玄関周りに飾っていただきました。報恩講の時期にちょうど見頃を迎え、境内が鮮やかになりました。菊を育てるには肥料の配分や与える時期などを細かく調整するなど、とても手間がかかるそうです。厚く御礼申し上げます。



広大会の様子



十月と十一月の広大会の様子です。十月は「焼きいも」をしました。昔のように落ち葉ではできないので、炭火でチャレンジしました。ご門徒さんに頂いたサツマイモを使わせていただきました。厚く御礼申し上げます。十一月は初の試みで短めの映画の上映会をしました。室内が明るすぎて少し見づらい様子でした。次にやるときは工夫が必要です。毎月子供たちが楽しく遊んでもらえるような活動を考えていますが、私自身の方が楽しませていただいている広大会です。



★広大会今後の予定★  
 9:30～11:00頃まで  
 1/23(土)  
 2/20(土)  
 3/27(土)  
 ※新型コロナの感染状況によっては中止とします。

行事案内

- 3月 9日(火)  
 梵鐘講・本山差向布教
- 3月15日(月)  
 涅槃会 (ねはんえ)

※ 詳細はまたチラシでご案内いたします。



広福寺ホームページ

◇当院の近況報告◇

十二月に行われた布教使試験に合格し、本山から布教使を拝命いたしました。例年であれば本山での試験でしたが、今年は新型コロナウイルス感染予防の観点から、リモートでの受験となりました。パソコンに向かっている布教実演という事で普段とは違うやりにくさを感じましたが、こうした形も次世代の伝道活動の一つの在り方なのだろうと感じました。